

保育者養成校での子育て支援：  
「母親が学生に語る」ことから得られるもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 美佐, 山本, 一成 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4370">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4370</a>

# 保育者養成校での子育て支援 —「母親が学生に語る」ことから得られるもの—

児童教育学部 児童教育学科 中山 美佐  
滋賀大学 山本 一成\*

\*大阪樟蔭女子大学非常勤講師

要旨：子育て支援は様々なところで行われている。地域の中では子育てサロンや、保育所、児童館など多くの場所がある。保育者養成校でも子育て支援を行うところも増えてきている。主に学生の学びとして子育て支援を行う場合が多い。学生が出し物をしたり、大学がひろばを提供したり、教員が専門知識を母親に伝えることもある。学生の学びとしては、未就園児と触れ合える、母親対応を学べるなどがある。しかし、母親は子育て支援を受けるだけでいいのだろうか。本研究では2017年に大阪樟蔭女子大学で行われた「子育てカフェ」の事例を通して、母親が大学で行われる子育て支援に参加することの意義について検討する。参加した母親のアンケート結果から、「母親が学生に語る」ことから得られるものを考察し、今後の新たな子育て支援の在り方について検討していく。

キーワード：子育て支援、学生、母親の語り、保育者養成、乳幼児

## 1 はじめに

子育て支援は様々な場で行われている。保育所・幼稚園・認定こども園など、子どもを預かり育てる場所でも行われ、地域の中にある児童館や子育てサロンや子育て広場でも行われている。保育者養成校でも様々な取組みを行っている。主に学生の学びの場として子育て支援が行われることが多いと思われる。小原等(2016)は「保護者と関わる経験が少ない学生に対し、養成段階で直接的な保護者とのかかわりの場をいかに用意するかが子育て支援力養成の課題として問われている。」<sup>1)</sup>と述べている。しかし、果たして、学生の教育的効果を求めての子育て支援でいいのだろうか。母親は、学生たちから子育て支援をしてもらう立場でとどまっていて、いいのだろうか。母親が学生たちとかかわることによって、得ることもあるのではないか。「母親が学生に語る」ことから得ること、また、保育者養成校の学生だからこそ伝えたいことがあるのではないかと考える。現代の母親について河野(2011)は「育児不安に陥りやすい母親の性向(考え方や思考)として『完璧主義』『対人不信』『生真面目さ』がありこうしたことが『育児への自信のなさ』や『否定的子ども観』に繋がりやすい」<sup>2)</sup>と述べている。様々な母親が、自分の経験や体験を、学生に語ることによって、母親自身の中に生まれる感情があるのでは

ないだろうか。あるとすればどのような感情だろうか。母親から、学生に「語る」ことから得られるものを追求し、今後の養成校での子育て支援につなげたいと思い本研究のテーマとした。

## 2 子育てカフェとは

### 2.1 2017年に行われた子育てカフェ

2017年度は全4回の子育てカフェを行った。7月には年1回大学内で行われる子育てカレッジ内で大学の1室を使い「子育てカフェ」を行った。10月・11月・12月は校内のレクリエーション室で全3回「子育てカフェ」を行った。この3回の「子育てカフェ」で学生が母親から、妊娠・出産・子育てについて聞く時間をそれぞれ30分間設け「母親が学生に語る」時間とした。カフェは子どもと母親、学生の飲み物を用意し、ホッと一息つける場所をコンセプトとした。

### 2.2 子育てカフェの詳細

#### 1) 子育てカレッジ内で行われた「子育てカフェ」

2017年7月に年1回行われる子育てカレッジでの「子育てカフェ」は多くの来場者があり、未就園児から小学校低学年の子どもを連れてきた親子で賑わった。このカフェでは、市の子育て支援課から子育てサポーターが訪れ、テーマトークを行った。①しつけのABC ②イヤイヤ期の過ごし方③オムツはずれの方法④子育て

ででイライラした時の解消法であった。子育てトークは母親が悩んでいることに対して子育てサポーターが、一つひとつの悩みに対して上手く寄り添い話を聞いて、悩みに答える場面もあった。学生たちもその輪の中に入り、未就園児と一緒に遊んだり、母親の悩みに耳を傾けたりした。

## 2) 学内で行われた「子育てカフェ」

10月・11月・12月に行われた「子育てカフェ」は、学生主体となるものであった。前半2回については、市の子育て支援課から子育てサポーターが来て、7月と同じ内容のテーマトークを行った。その他の時間を、「母親の語り」を30分交えて、学生の出し物を行った。

## 3 調査概要

### 3.1 調査方法・手続き及び結果

7月「子育てカフェ」から

1) 調査対象者は学生14名、母親101名であった。調査手続きとしては「子育てカフェ」終了後、アンケートに記入してもらった。アンケートには研究目的を明記し、プライバシーポリシーを添付した。回答についてはそれぞれの項目に対してパーセンテージを算出した。

2) 設問内容については母親に対して6つの質問を行った。①子育てカフェはいかがでしたか？②学生のかかわりで良かったものは何ですか？③どんな保育者がいいですか？④子どもができた喜びについて学生に伝えたいですか？⑤子どもを育てる楽しさや苦しさを学生たちに伝えたいですか？⑥自由記述。なお、学生のアンケートについては本稿では省略した。

#### 3) アンケート結果

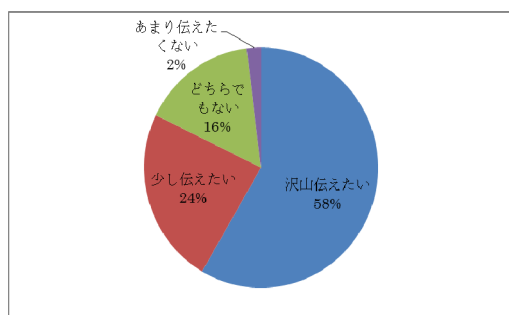


図1 子どもができた喜びについて学生に伝えたいか？

図1のように母親が学生に子どもができた喜びについて伝えてみたいかという質問に58%の母親が沢山伝えたいと回答し、24%の母親が少し伝えたいと回

答しており、82%の母親が伝えたいと答えていた。多数の母親が、学生に自分の出産や、子育てについて伝えたいと考えていると推察される。しかし16%の母親はどちらでもないと回答しており、2%の母親があまり伝えたくないと回答していた。個人的なこともあり、学生に伝えることに抵抗がある母親も僅かではあるがいる。また、図2のように子どもを育てる喜びや苦しみを学生に伝えたいか？という質問に55%の母親がたくさん伝えたいと答え、24%の母親が少し伝えたいと答えており、79%の母親が学生に話したいと答えている。このように多くの母親は自分の子育ての体験を学生に話したい、伝えたいと思っていることがわかる。しかし、自分が話すよりも子育てについて、聴きたい、教えて欲しいと望む母親もいるとも推察される。

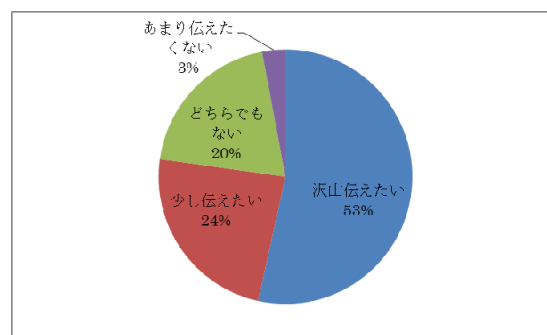


図2 子どもを育てる楽しさや苦しさを学生に話したいか？

### 3.2 調査方法・手続き及び結果

10月11月12月「子育てカフェ」から



図3 子育てカフェの様子

1) 学生、母親に対してアンケート調査を行った。調査手続きとしては「子育てカフェ」終了後、アンケートに記入してもらった。アンケートには研究目的を明

記し、プライバシーポリシーを添付した。調査対象者は10月「子育てカフェ」参加者10名、学生15名であった。11月「子育てカフェ」は参加者16名、学生9名であった。12月「子育てカフェ」は参加者19名、学生10名であった。学生については比較対象として子育て支援実践授業に出席していた学生、どちらにも出席していなかった学生についても同時期に同様のアンケートを行った。回答については問1から問5までは平均値を求め、問6はSCAT(大谷、2008)<sup>3</sup>を用いた質的分析を行った。具体的には先ずテキストには母親の自由記述そのままを記入した。〈1〉としてテキスト中の注目すべき語句を書き出した。〈2〉としてテキスト中の語句のいいかえをした。〈3〉として〈2〉を説明するようなテキスト外の内容を記入した。〈4〉としてテーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)、〈5〉として疑問・課題を取り上げた。次に、ストーリーラインについては実際には〈4〉の構成概念をつなぎ合わせたものとした。〈4〉をそのまま記入し、その後文と文のつなぎ合わせを分析者が行った。また、理論記述についてはストーリーラインから文を紡ぎ、より一般的な表現にした。最後に、疑問・課題については分析者が全体の文から考察を行い記入した。

2) 設問内容については母親に対して6つの質問を行った。①本日子育てカフェに参加されたお子様は何歳ですか。参加されたお母さまは何歳代ですか。②子育てカフェに参加されて良かったものに丸を付けて下さい。③学生たちに自身の子育てや、出産などを伝えることについてどのように思いましたか。④子育てなどについて学生たちに伝えたり、話したりするを通して感じたことについてお答えください④-1『毎日頑張っている自分を褒めてあげたいと思った』④-2『改めて子どもがかわいい・大切な存在であると思った』④-3『子育てを通して自分自身が成長した』④-4『成長していく子どもを見て、頑張ってる子育てでできている』と思った。④-5『まだママになっていない学生たちに、先輩ママからのアドバイスができた』と思った。④-6『将来保育者となる学生たちに「母親の想い」を伝えられた』と思った。④-7『学生たちには赤ちゃんを産み、育てて欲しい』と思った。⑤子育てカフェにまた参加したいですか。⑥ご感想・ご要望があれば、ご自由にお書きください。なお、学生のアンケートについて本稿では省略した。

### 3) アンケート結果

①参加母親の年代は30代、40代が多かった。ま

た、子どもの平均年齢について第1回目は1.2か月、第2回目は1.3か月、第3回目も1.3か月であった。②の質問については支援課のお話が良かったと答える母親が多く、次いで学生の対応、三番目に学生との対話となっていた。③については4.4~4.7、④-1については3.8~3.9、④-2については4.3~4.8、④-3については4.0~4.5、④-4については4.0~4.2、④-5については3.3~3.7、④-6については3.2~4.3、④-7については4.5~4.8、⑤については4.5~4.7という結果であった。⑥の自由記述については後述する。

## 4 アンケート結果の考察

### 1) 平均値・パーセンテージから

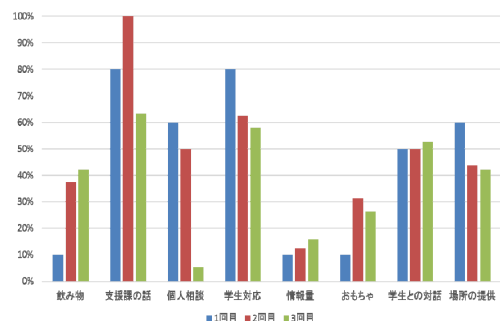


図4 何が良かったか？

図4から何が良かったか？という質問に対してはパーセンテージを算出した。飲み物については第1回目から徐々に良かったという声が多くなっている。支援課の話については第1回目、2回目ともに高い割合で満足が得られ、特に2回目では全員が良かったと答えている。3回目については支援課からのお話は少なかったため減少している。個人相談については1回目、2回目は相談する機会があったが、3回目については学生主体の内容であったため個人相談はしにくかったのかもしれない。学生対応については1回目は高い満足度が得られたが2回目3回目と徐々に減っている。3回目は学生主体の内容であったため個別の対応は少し難しかったのかもしれない。情報量については大きな変化はなかった。おもちゃは1回目の学生の振り返りから用意するおもちゃを2回目で変えてみた。その結果、少し満足度が増えている。1回目は描くものを用意したがそれを使って遊ぶ子供はあまりいなかったため、それをなくし遊ぶ広さを確保するようにした。おもちゃ自体は増えてはいないが、満足度は上がっている。おもちゃの量よりも遊ぶスペースの確保が大切であると言えるかもしれない。学生との対話につ

いて1から3回ともに50%台であり、満足できた保護者と満足していない保護者が半半ずつくらいだったことがわかる。対話することが楽しかった、面白かったと感じる一方で、学生たちとの対話には興味が持てなかったり、満足できなかった保護者がいたと考えられる。場所の提供については、1回目は人数が少なく広々とした空間が良かったのかもしれない。3回目は学生が提案した製作の広さについて狭いと感じたのかもしれない。全体的にみて考察すると支援課のお話について満足度が高く、次いで、学生の対応の良さ、学生との対話が良かったと感じたと思われる。支援課からのお話の満足度には劣るかもしれない。

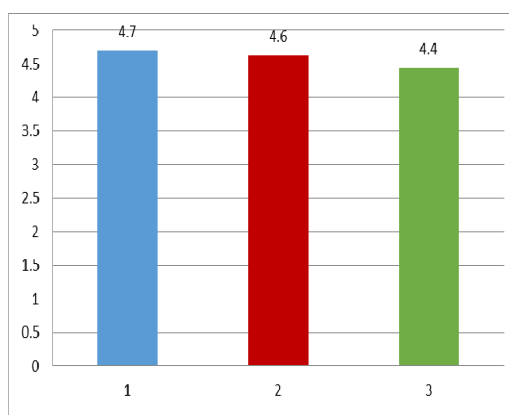


図5 学生たちに語ることは良かったか？

問3からのアンケートは5件法で行われ、5が最も良いという内容とした。図5のように、質問3の回答は、平均値で見ると第1回から第3回まで大きな変化はなく、4以上であることから、お母さん方は自分の子育てや出産について学生と話せたことが良かったと、満足度は高かったと考えられる。学生に話す・語ることが多くの母親にとって良い体験になったことがわかる。質問4の平均値については、④-1では3.9もあったことから、すごく自分を褒めたいとは思わないが、頑張っている自分を認めていると考えられる。④-2からは改めて自分の子どもを可愛い・大切と思うかの質問に4.8、4.3、4.8と高い平均値が出ている。このことから子どもが可愛い、大切と思っている母親が多いと考えられる。④-3からは子育てを通して自分が成長したと思えるかの質問に4以上の平均値が出ており、自分が子育てで成長したと思っている母親が多いと考えられる。④-4からは成長していく子どもを見て頑張っている子育てできていると思うかという質問に平均値4以上であり、概ね母親は子育てを頑張っていると思っていると考えられる。

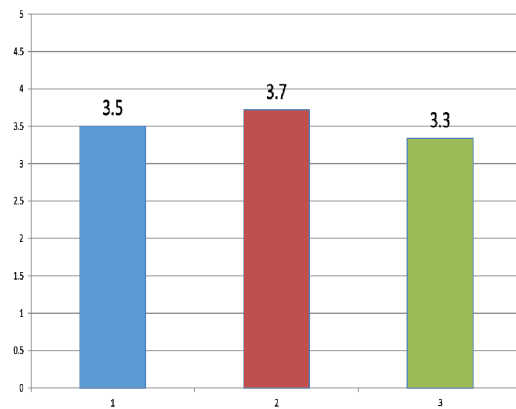


図6 学生たちにアドバイスできたか？

図6のように④-5学生たちにアドバイスできたかとの問いについては、ばらつきはあるものややできたと感じていると考えられる。しかしながら、自分の経験を語ることの良さと比較すると、アドバイスとはまた違う角度から母親たちは学生に「語った」と考えられる。

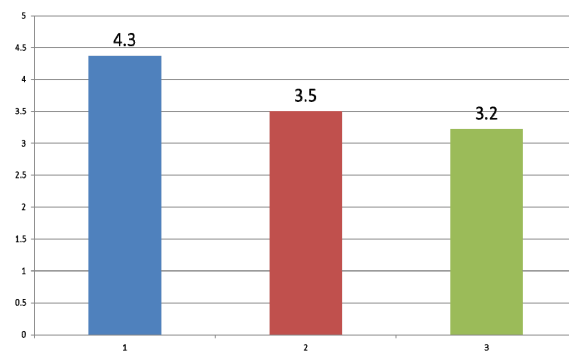


図7 母親の想いを伝えられたか？

また、図7のように④-6母親の想いを伝えられたかの問いには、第1回目は4.3と概ね高いと思われる結果が出たが第2回、3回についてはどちらでもないという結果であったと考えられる。学生たちとの語りにより母親の想いについて2回目、3回目は話題があまりなかったのかもしれない。④-7学生には赤ちゃんを産み育ててほしいかという問いには、高い平均値が出ており、多くの母親が、学生たちには母になってほしいという思いがあると考えられる。問5子育てカフェにまた参加したいかという問いにも高い平均値が出ており、また、参加したいという母親が多かったことを示している。ここから、子育てカフェは母親にとって、また来たいと思う内容、場であったと考えられる。

## 2) SCAT分析から

本編では、最終回(12月)に行われた子育てカフェの母親の自由記述の抜粋の分析例を表1に記した。

表1 SCAT分析例

番号	発話者	テキスト	<1> テキスト中の注目すべき語句	<2> テキスト中の語句の言いかえ	<3> 左を説目利するようなテキスト外概念	<4> テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5> 疑問・課題
10	母親	3回とも参加させていただきました。毎回、学生さんとお話するのが楽しみです。話す自分が結婚・出産なんてずっと先のことだと思っていた頃、どんなふうを考えていたかなとか振り返ることができて本当に私にとって良い体験になりましたありがとうございます。	3回・参加・毎回・学生・お話・楽しみ・自分・結婚・出産・ずっと先・振り返る・私・良い体験	全会、一緒に、いつも、伝える、嬉しさ、私自身、一緒に住む、子どもを産む、想像できない、思い出す	学生とのかかわりが無い時代、話す機会のなさ、伝える楽しさ、自分を振り返る機会がない	学生に話す楽しさ、自分のことを伝える嬉しさ、若いころを振り返る時間の大切さ	母親が自分のことを話す、伝える機会の大切さ

表2 ストーリーライン・理論記述・課題

ストーリーライン（下線は<4>の内容を示す）	<p>データはあっても写真はない、実際の写真が多くはない母親たちは、写真をもっと欲しいと思っているように感じられる。過ごしやすい場所、ゆったりできる場所、また、楽しい企画であれば、何度も来たい、足を運びたいと母親たちは思っているだろう。だからこそ、母親たちは何度も足を運び、子育てカフェに参加したのだろう。学生たちに子どもをあやしてもらえば、ホッとできる、子どもが喜ぶと嬉しいと母親たちは考えていると思われる。また、多くのおもちゃや子ども同士のかわりを求めて参加する母親もいる。子育ては特別なことではないと考えている母親もいるが、他の母親との交流を求めている姿もあり、一人で子育てすることのしんどさや苦しさも伝わってくる。学生とかかわることで、学生から我が子の成長への想像し期待する母親もいる。きっと大きくなると、子育てに頑張れる母親もいる。学生の企画した内容の子育てカフェは、仕事が楽しめ、家とは違い汚れても良い環境で行われた。家ではなかなかできない経験がしたい母親もいる。また、母親自身が工作することが楽しかった様子である。毎回行われた学生との話では、学生に話す楽しさ、自分のことを伝える嬉しさ、若いころを振り返る時間の大切さを感じられた母親もいた。しかし、人間関係を構築することが苦手な時代であるためか、母親に話しかけにくい学生、母親も話しかけられるまで話せない母親もいて、お互いに話したくてもなかなか話したくないこともあった。もっと積極的に聞いて欲しかったと思う母親もいた。今回のような親子とのかかわりの中、保育者として学んでほしい、母親も助けられる保育者になってほしいと望む声もあった。また、母親はみんな頑張っている、自分も母親になるまで、子育てのしんどさが分からなかった、保育者には子育てを助けてほしいと願う母親もいる。学生には、伝えたいことが母親にはあると思われる。</p>
理論記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スマホの普及により子どもの情報はたくさんスマホには入っているが、現物の写真は少ない。</li> <li>・現在の親子の住む環境は近隣の親子を招き入れ遊ぶ広さの確保は難しい。また、母親同士の人間関係の希薄さがある。</li> <li>・親子だけで過ごして楽しいと思える時間が少なくなり、楽しいと思える場所を母親たちは求めている。</li> <li>・親材を使って何かを親子で作る機会は家の中ではあまりない。その経験を母親ができていない。</li> <li>・子育てが孤育てにならないためにも母親同士のかわりは大切であり、その場の提供は欠かせない。</li> <li>・子育ての頑張っていることを認めてほしい母親たちは、認めてもらう機会がない。</li> <li>・学生に自分の妊娠・出産・子育てを伝えることで自分を振り返ったり、自分を認めたりすることができる。子育てへの自信につながる。</li> <li>・学生と触れ合うことで、自分の子どもと重ね合わせ大きくなったら、こんな風になると子育てに楽しみも持てる。</li> <li>・学生に子育ての大変さを伝えることで、将来、母親へのサポートもできる保育者を育てることもつながる。</li> <li>・未来の保育者への期待は大きく母親もサポートできる保育者に育ってほしいと思っている。</li> </ul>
さらに追及すべき点・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・過ごしやすい場所の確保。母親の望みを汲み取る工夫の大切さ。母親が、ゆったり過ごすことができる、子どもをあやしてくれる場所の必要性</li> <li>・おもちゃを持ち寄って遊ぶ環境の確保</li> <li>・地域でゆったり過ごす場所の必要性。地域の中で親子が楽しめる場所や企画の必要性</li> <li>・学生との触れ合える場所、かかわることで安心できる機会の大切さ</li> <li>・親子2人ではできない経験ができる企画の工夫。家ではできないことができる企画や場所の持ち方</li> <li>・親子が学生とかかわることができる場所や機会の大切さ。母親が学生に伝えたいことを伝えられる場所や機会の必要性。</li> <li>・母親が自分のことを話す、伝える機会の大切さ。頑張っている母親を認める機会の持ち方。</li> <li>・母親のサポートもできる保育者の養成の大切さ。</li> <li>・母親同士が交流を深めていける場や企画が必要</li> <li>・学生と親子のかかわりの機会を多く持つにはどのようにするのか。母親が保育者に望むことを伝えられる場の持ち方</li> <li>・学生とかかわる場所や企画の大切さ。子どもに多くかかわる学生の大切さ。母親の気持ちを汲んで様々なイベントを考える学生の養成の大切さ。</li> </ul>

以上のように4ステップのコーディングを行い、次に、各記述の<4>のテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論記述を行った。

第3回子育てカフェのストーリーライン・理論記述・追及すべき点・課題は表2のとおりである。

## 5 総合考察

今回の子育てカフェをとおして、母親が学生に「語る」ことは、母親にとって、楽しいひと時であっただろう。あまり話すことのない自分の経験を学生に「語る」ことは、母親自身が今までの自分を振り返ることになったと思われる。自分は、頑張ってきた。子どもも少しずつ大きくなった。妊娠した時は、出産さえとても不安だったが、子どもが生まれ、母となり、自分の母親の気持ちを理解したり、母親のありがたさを身をもって知ったことなどについても、「語る」ことから改めて自分を振り返る経験となったと思われる。

学生と話すことは子育て支援の専門家や、教諭と話すときとは違い、気負いせず「語る」こと、話したいことだけを話せる良さがあっただろう。また、学生に教えてあげることができる機会になったと思われる。さらに、保育者養成校の学生だからこそ伝えたいこともあったと思われる。母親たちは、未来の保育者にとっても期待しており、子どものサポートだけではなく、母親もサポートしてくれるような保育者にしっかり育ってほしいと思っていることも「語り」の中にはある。また、話す内容を決めていない、話さないといけないことが決まっていない中での「語り」は、教えてもらう、寄り添ってもらうこととは違い、自分を出す、言葉で自由に表現する楽しさを味わうことができたのではないかと考えられる。「語る」うちに、様々なことを思い出し、話が展開されたと思察される。だからこそ、学生と話すことが良かったと思えた母親が多かったのだろう。子育て支援といえどもどうしても支援してもらい立場になりやすい母親が、「語る」ことを通し、知らぬ間に自分が学生を支援する立場となる。子育てを見聞きしていない世代の学生に、自分も見聞きしてこなかった子育てについて、経験したことを話せることは母親が、自分に自信を持つことに繋がるのではないだろうか。言い換えれば、支援してもらいばかりの自分ではない、教えて伝えられる自分を見出せたのではないだろうか。また、「語る」ことは、新しく自分を見つける機会になったと考えられる。さらに、若い学生を見て、自分の子どももこんなふうになくなるんだと子どもの大きくなった姿を具体的に

想像できるのではないだろうか。人と人とのつながりが希薄になってきている今、「語る」ことは人とのつながりを持つ機会にもなるだろう。伊藤(2018)は「職住一致の家庭が大多数だった時代は、主たる労働を担うのは夫や妻であり、子育てを祖父母やきょうだいが手伝っていました。また、子育て経験者が、若い親からの相談を受けたり、働き手となる者に代わって病気の子どもの面倒をみたりするなど、地域の近隣住民どうしの強いつながりもありました。こうした相互扶助関係は、出産や子育てを初めて経験する親にとって、大変心強く、子育ての不安を軽減させる役割を果たしてきました。さらにこのような日常生活のなかで、子育てに関する知識や経験が次の世代へと継承されていきました」<sup>4</sup>と述べている。時代は大きく変容し、子育てを全く見聞きしていない母親たちは、何をするのも不安で、情報だけが多い中での子育てをしている。不安や心配が多いことは確かである。子育て支援を行う場所は多くあり、母親たちはそれを望み、足を運んでいる。保育者養成校でも多くの子育て支援を行っている。帝塚山大学では子育て支援センター「まつぼっくり」を大学に併設している。取組としては季節の行事を行ったり、親子の触れ合い遊びをしたり、子育て相談などの活動を行っている。地域の中で、地域に開かれた活動は、近隣の母親たちには心強い存在だろう。また、学生たちも未就園児の子どもや母親に会える経験が学びに繋がると思われる。保育者養成校の子育て支援は、様々な形で行われているが、どのような形で支援を行うのかについて、今後、養成校でも考察を深める時期に来ていると思われる。

## 6 おわりに

多くの子育て支援がある中で「母親の語り」は学生にとっても、母親にとっても子育てに関係する良い経験になると考察される。母親が「子育てを語る」ことは、すなわち「自分を語る」ことに繋がるであろう。話すことによって得られる自己肯定感や、それに近い気持ちが持てることは、支援をされて感じることはまた違うのではないかと考察される。しかし、それによって、母親の気持ちが前向きになり、子育てに良い影響を与えるとすれば、「母親の語り」は、子育て支援といえるのかもしれない。子育て支援における「母親の語り」について、今後も多くの機会を持ち、引き続き考察を行っていきたい。

## 参考文献・引用文献

- 1) 小原敏郎・中西利江・直島正樹・石沢順子・三浦主博 (2016) 「保育者養成校がキャンパス内で行っている子育て支援活動に関する調査研究」共立女子大学家政学部紀要第62号 pp.153-163
- 2) 河野順子 (2011) 「母親が抱える育児不安に関する要因—子どもの育てにくさ、母親の認知様式、父親の育児参加をめぐる—」東海学園大学研究紀要第16号 pp.55-64
- 3) 大谷尚 (2008) 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」

名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学) 54 (2) pp.27-44

- 4) 伊藤篤 (2018) 『子育て支援』ミネルヴァ書房p.5

## 謝辞

本稿の作成にあたり、御助言、御指導くださった大阪総合保育大学大学院の渡辺俊太郎先生に深く感謝いたします。また、本研究は大阪樟蔭女子大学くすのき研究助成プログラムの支援を受けて実施されました。貴重な研究の機会をいただいたことに感謝いたします。

## **Childcare Support at Childcare Worker Training Schools : The Benefits of “Mothers Speaking to Students”**

Faculty of Childhood Education, Department of Childhood Education

Misa NAKAYAMA

Shiga University

Issei YAMAMOTO\*

\* Osaka Shoin Women's University, Part-time lecturer

## Abstract

Recently, various places hold a child care support program in the local community; such as child care salon, nursery school, children's center and so on. Child care worker training schools also start some child care programs for students' learning. Generally, in these cases, the school offer a gathering place, students show some programs for children and a specialist of child care holds a lecture to mothers. Students can learn about small children and child care support for mothers in these activities. However, what about the mothers' role? Are they just passive guests in these activities? In this research, we discuss the active role of mothers in child care support program. We analyse the questionnaire for mothers who participated in “child care café” held in Osaka Shoin Women's University in 2017. We focus on the meaning of ‘mothers speaking to students’ in order to establish a new form of child care support program in university.

Keywords: Child care support, Student, Mothers Speaking to Students, Child care worker training, Infant